

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13008

研究課題名（和文）バーリントン・ファイン・アーツ・クラブとジャポニスムー展覧会、交遊、男性性

研究課題名（英文）Burlington Fine Arts Club and Japonisme: Exhibitions, Friendships, Masculinity

研究代表者

糸 和沙（KUME, Kazusa）

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：20634900

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英国紳士階級の日本美術愛好家の社交の場であったバーリントン・ファイン・アーツ・クラブについて、クラブ主催の日本美術展、日本美術を介した会員間の交遊、男性の社交空間における日本美術受容の実態といった調査項目を立て、検討を行なった。資料および作品調査の結果、名士たちが集う同クラブが主催した日本美術展には、小規模ながらも美術館や博物館主催の展覧会に匹敵する反響があったことや、その展示方法や作品分類が、国境を超えフランスやアメリカで開催された日本美術展にも取り入れられていた事実が明らかとなった。これにより、ジャポニスムの研究史において、同クラブの活動が果たした役割を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブは、近年受容史研究の観点からその活動が顧みられるようになった組織である。クラブ発足後、たびたび開催されていた日本美術展については、先行研究でも言及されることはほぼなかった。本研究の特色は、ジャポニスム研究の視点からバーリントン・ファイン・アーツ・クラブの活動を見直し、日本美術展開催に至るまでの経緯を検討した点にある。この30年あまりで飛躍的に進歩したジャポニスム研究の成果を踏まえ、近代イギリス特有のこうした男性を中心とする組織における日本美術受容について考察したことは、美術史のみならず、社会史などの隣接分野に対しても新たな問いを触発すると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the Burlington Fine Arts Club, a social venue for British gentlemen enthusiasts of Japanese art. I focused on several key areas, including the club's Japanese art exhibitions, interactions among members through Japanese art, and the reception of Japanese art within male social spaces. My investigation of materials and works revealed that the Japanese art exhibitions hosted by the club, although small in scale, had an impact comparable to exhibitions held by art museums and galleries. Additionally, I discovered that the exhibition methods and categorization of works used by the club were adopted in Japanese art exhibitions held in France and the United States. This confirms the significant role played by the Burlington Fine Arts Club in the history of Japonisme research.

研究分野：人文学

キーワード：ジャポニスム 展覧会 受容史 浮世絵 コレクター ジェントルマンズ・クラブ 訪日画家 近代イギリス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ジャポニスム（西欧に与えた日本の影響）研究の中心的テーマは、いまだ前衛主義の立場からフランスの「偉大な」芸術家に影響を与えた作例の分析にとどまり、日本と密接な政治的・経済的関係にあった近代イギリスで日本の品物が大量に流入し、幅広く受け入れられた事実について、具体的な検証はほとんど行われていない。報告者は、こうした広範囲に及ぶイギリスのジャポニスムの実態について考察すべく、ジャポニスムを担った様々な異なる主体—国家と個人による日本美術コレクション、唯美主義の芸術家、産業芸術と装飾のデザイナー、そして受容者としてのミドル・クラスの女性—を個別に検証し、エリート芸術家からミドル・クラスへ、産業芸術の製造者から消費者へ、また男性から女性へ、イギリスのジャポニスムが波及していく過程を明らかにした（単著『美と大衆 ジャポニスムとイギリスの女性たち』ブリュッケ、2016年）。こうした多様なジャポニスムの担い手たちの存在を提示した先に、浮かび上がってきたのは、それぞれの主体がどのように相互的に影響を及ぼしていたのかという問題であった。

そこで本研究で着目したのが、日本びいきの画家やデザイナー、美術批評家、コレクターらが多数会員として名を連ねたバーリントン・ファイン・アーツ・クラブである。近代イギリス特有の男性の社交空間において、日本美術を介してどのような交流がなされたのか、さらに同クラブの主催により 1870 年～90 年代に行われた日本美術展がジャポニスムの大衆的受容にいかなる役割を果たしたのかを検討することで、ジャポニスムの受容史をより俯瞰的に、さらにはジェンダー的観点を交えて考察できると考えたからである。特にバーリントン・ファイン・アーツ・クラブは、西欧におけるジャポニスムの展開に重要な役割を果たした男性芸術家・美術批評家・コレクターによって構成された組織であるという点でも見過ごすことのできないものである。いかなる経緯でバーリントン・ファイン・アーツ・クラブは日本美術展を開催し、そこでどういった作品を展示したのか。また会員の間で日本美術を介してどのような交遊がなされたのか。「ジェントルマンズ・クラブ」という男性の社交空間において、ジャポニスムがどのように作用したのか。こうした「問い」に答えるための社会的、ジェンダー的観点に立脚した調査研究を行なうべく、本研究課題に取り組むこととなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀末のイギリスにおいて、紳士階級の日本美術愛好家の社交の場であったバーリントン・ファイン・アーツ・クラブについて、クラブ主催の日本美術展、日本美術を介した会員間の交遊、男性の社交空間における日本美術受容の実態（ジャポニスムとマスキュリティ）といった項目を立て、調査検討を行なうことにある。さらには、これまで申請者が取り組んできた女性を主体としたジャポニスムとの比較検討を行ない、ジャポニスムの受容史をジェンダー的観点から再構築することを目指すものである。なお、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブで開催された日本美術展に関する調査研究はこれまでになく、本研究が最初の取り組みとなる。

3. 研究の方法

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブは、近年ようやく受容史研究の観点からその活動が顧みられるようになった組織である。クラブ発足後たびたび開催されていた日本美術展について詳細な調査研究はこれまでに行われていなかった。そこで、本研究では、まずロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館、ナショナル・アート・ライブラリー、大英図書館を中心に、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブが主催した日本美術展に関する基礎資料の収集、および、関連作品の調査を実施した。これを踏まえ、帰国後にこれらの資料を分析し、展覧会を組織した同クラブの会員たちの情報を収集するとともに、展覧会カタログについては出品作品の同定作業を行ない、エクセルによって作品の情報をリスト化していく作業を進めた。このように初年度については、当初の計画通りに英国での資料収集・作品調査を実施した。しかし、翌 2020 年度以降はパンデミックによる海外渡航制限の影響を受け、ロンドンにおける資料収集や作品調査を継続することが叶わなかった。そこで当初の研究計画を見直し、デジタルアーカイブや資料の遠隔複写サービス等を積極的に活用しながら、調査研究を進めることとした。このように想定外の事態により当初の計画通りに進まないことも多々あったが、時には在外研究者の支援も得ながら、調査研究を遂行した。しかし、現地のアーカイブに赴かなくては入手が困難な一次資料も多いことから、二度の調査期間の延長を申請し、最終年度となる 2023 年度に、ロンドンのナショナル・アート・ライブラリー、およびパリの美術史研究所等で、ようやく二度目の海外調査を実施した。

4. 研究成果

本研究では、以下のとおり、バーリントン・ファイン・アーツクラブにおける、(1) 日本美術展、(2) 会員同士の交遊、(3) ジャポニスムとマスキュリニティ(男性性)という三つの考察軸をもうけた上で、段階的な調査研究を行なった。以下にその概要と調査によって得られた成果について述べる。

(1) 日本美術展に関する調査研究

【表1】に示したとおり、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブでは、会員のコレクションを中心にクラブ内のギャラリーで日本美術の特別展を実施している。女性を含む一般客も特別展のときに限り、クラブを訪れることができた。なかでも、1888年の「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本」展は、フランスのジャポニスムの立役者の一人である美術商のジークフリート・ビングが手がけた「大浮世絵展」(1890

| 開催年 | 展覧会名 |
|---------|----------------------|
| 1875-76 | 日本の漆器展 |
| 1878 | 日本と中国の美術作品展 |
| 1888 | 日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展 |
| 1897 | 日本の漆と金工展 |

【表1】バーリントン・ファイン・アーツ・クラブが主催した展覧会の一例

年、パリ)をはじめ、以後西欧で開催された浮世絵展にも影響を与えたという点で、美術史上重要な展覧会である。だが、これらの展覧会はジャポニスム研究史において長らく見落とされ、今日まで体系的な研究は行なわれていない。そこで、クラブ主催の日本美術展について、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館、ナショナル・アート・ライブラリー、大英図書館において、展覧会のカタログや批評記事の収集、クラブ会員からなる展覧会の運営委員会に関するアーカイブ調査を行なった。また、ロンドンの美術界におけるジャポニスムの状況を明らかにするため、19世紀末にロンドンで行われた日本美術展についても資料調査を実施した。展覧会の批評記事については、現地調査にくわえて、The British News Paper Archive等のデジタル・アーカイブを利用し、帰国後も継続して調査を進めた。こうした一連の資料調査を踏まえ、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブが主催した日本美術展、またそれと同時期にロンドンで開催された日本美術展について、その概要や展覧会の規模、出品者等の情報をまとめ、比較検討を行なった。これにより、名士たちが集うバーリントン・ファイン・アーツ・クラブが主催した日本美術展は、小規模ながらも、ときに美術館や博物館主催の展覧会にも匹敵する反響を呼び、その展示方法や作品分類は、国境を超えフランスやアメリカで開催された日本美術展にも取り入れられていた事実を明らかにした。この調査で得られた資料や知見は、論文「バーリントン・ファイン・アーツ・クラブとジャポニスム—19世紀末イギリスにおける浮世絵版画受容についての一考察」にまとめ、『実践女子大学美術史学』において発表した。

当初の研究計画では、フランスにおける資料収集および作品調査は、調査の初期段階に実施する予定であったが、コロナ禍による海外の渡航制限もあって現地での調査は先延ばしになっており、最終年度によりやく実現することができた。2019年度に実施したイギリスにおけるバーリントン・ファイン・アーツ・クラブに関するアーカイブ調査、およびその後日本国内において実施した文献調査によって、ビングが1888年に同クラブで行われた浮世絵展を踏まえて、1890年に「大浮世絵展」を組織したことは明らかであったが、今回フランス側の資料調査によってもこのことを裏付けることができた。また今回の調査によって、ビングがフランス国内のみならず、1880年代後半以降イギリスの日本美術愛好家とのコネクションをも充実させ、イギリスでも積極的に美術商としての事業を展開しようとしていた事実も浮かび上がってきた。こうしたビングの活動がイギリスのジャポニスムに与えた影響については、別途論文としてまとめて報告する計画である。

(2) 会員同士の交遊に関する調査研究

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブの会員には、大英博物館の日本美術コレクションの基盤を築いたアーサー・ウォラトン・フランクスや美術批評家のジョン・ラスキン、「アート・ジャーナル」の編集者マーカス・ヒューイッシュ、画家で日本美術愛好家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、フレデリック・レイトン、ジェイムズ・マクニール・ホイッスラー、エドワード・バーン＝ジョーンズといった当時の芸術界を牽引した人物が多数含まれる。ジャポニスムの担い手とされた芸術家・コレクター・美術批評家がどのように相互に影響を与え合い、日本への関心を共有していたのか、明らかにすることが本調査項目の目的であった。

当初は、ナショナル・アート・ライブラリーや大英図書館に保管されている彼らの日記や回顧録、書簡など、イギリスでの一次資料調査を計画していたが、2020年度以降はパンデミックにより渡航が叶わなかったため、国内で入手可能な二次文献やデジタル・アーカイブを活用し、可能な限り資料収集を行なった。まずは、D.G.ロセッティ、F.レイトン、J.M.ホイッスラーといった芸術家たちに焦点をあて、彼らの日本美術愛好家としての一面について、二次文献をもとにコ

レクションの概要を整理した。次いで会員として、クラブ主催の日本美術関連の展覧会に携わりながらも、今日ではあまり知られていない画家の経歴やコレクションに関する調査に着手した。とりわけ注目したのが、同クラブの日本美術展にたびたび自身のコレクションを提供し、来日経験をもつ水彩画家のフランク・ディロンである。現在では彼の画業が顧みられることはほぼなく、その経歴には不明な点も多いが、同クラブのジャポニズムを検討する上で重要な人物である。イギリスでの資料収集調査については、実践女子大学の校務や海外への渡航制限により断念せざるを得なかったが、デジタル・アーカイブの活用と横浜開港資料館等の日本国内に保管されている資料をもとに資料調査を行ない、その研究成果は論文「フランク・ディロンと日本—19世紀末英国における訪日画家とその作品受容をめぐる」にまとめ、『実践女子大学美術史学』において公表した。

この調査で明らかになったことのひとつは、日本に滞在した経験を持つ人物ほどロンドンの日本美術愛好家のコミュニティで存在感を放ち、自身のコレクションと知見を活かした展覧会を企画するなど中心的な役割を担っていた事実である。同クラブの会員で、1870年代に日本を訪れた画家ディロンもその一人だが、訪日画家の多くは当時の知名度や影響力とは裏腹に、没後は英国近代美術史上からは忘れられ、現在に至るまでその画業や活動が顧みられることはない。本調査項目の遂行によって表面化した、こうした来日画家のイギリスでの活動と作品受容をめぐる問題については、2022年度より科学研究費「明治期の訪日英国人画家の制作と活動に関する研究—19世紀末英国美術市場の観点から」として新たに研究課題を設定し、別途さらなる調査研究に取り組んでいる。

(3) ジャポニズムとマスキュリニティ（男性性）に関する調査研究

(1) 日本美術展と(2) 会員同士の交遊の資料調査によって、紳士階級の男性を主体とするクラブの日本美術受容の特徴(好まれた作家や主題の傾向など)が明らかとなった。こうした調査を踏まえた上で、近代イギリス特有の「クラブ」という男性の社交空間におけるジャポニズムについて考察した。また、男性会員の中には、画家のE. バーン=ジョーンズのように、1880年代以降ミドル・クラスの女性たちの間で流行した日本趣味について否定的な見解を書き残している者も多い。こうした男性会員による日本美術論についても調査検討を行なった。さらに、本研究の総括として、これまで報告者が取り組んできたミドル・クラスの女性たちを主体とするジャポニズムとの比較検討を実施した。

以上のような調査研究によって、こうした近代イギリス特有の男性を中心とする組織における日本美術受容の実態とその活動の影響が明らかとなった。とくにバーリントン・ファイン・アーツ・クラブが実施した日本美術展のなかでも、1888年に開催された「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本」展はジャポニズムの研究史において重要なものとして位置づけられよう。このとき会員たちが実践した、自らのコレクションを持ち寄るという形式や出品作品の時代区分は、1888年の浮世絵展の翌年にニューヨークのグローリナー・クラブで開催された「日本の浮世絵版画と版本」展、1890年にジークフリート・ビングを中心に著名なコレクターたちがコレクションを出品した「大浮世絵展」など、以後西洋で行なわれた浮世絵版画の展覧会でも踏襲されることになった。さらに、1880年代以降の公的な博物館・美術館におけるコレクションの充実は、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブの会員として名を連ねた、ジャポニズムの第一世代の活動やコレクションの寄贈・売却の上に成り立っていたこともまた、忘れてはならないのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 糸和沙 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 フランク・ディロンと日本 英国における訪日画家とその作品受容をめぐって | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 実践女子大学美術史学 | 6. 最初と最後の頁 17-32 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002359 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 糸和沙 | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 バーリントン・ファイン・アーツ・クラブとジャポニスム 19世紀末イギリスにおける浮世絵版画受容についての一考察 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 実践女子大学美術史学 | 6. 最初と最後の頁 33-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002113 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|